

スポーツと地域主義—東アジアと東南アジア

早瀬 晋三[†]

Sports and Regionalism: East Asia and Southeast Asia

Shinzo Hayase

This paper will clarify the reasons for the success of regional sports events in Southeast Asia, which are more exciting than the Olympics and the Asian Games. On the other hand, in East Asia centered on Japan, China, and South Korea, we will consider the reasons why regional sports events have been lacking in excitement and have finally ceased to be held. We will discuss sports for the region.

〈はじめに〉

筆者は、2020年に『東南アジアのスポーツ・ナショナリズム—SEAP GAMES/SEA GAMES 1959–2019年』（めこん）を上梓した。ここでは、海域社会に属する東南アジアを理解するための恰好の材料として、東南アジアの国・地域だけが参加しているスポーツ大会を選んだ。考察の過程で、このスポーツ大会が、それぞれの国・地域のナショナリズム昂揚にいかに関与しているか、あるいは作爲的に利用されているかがわかってきたため、その重要性に鑑みて、タイトルを「東南アジアのスポーツ・ナショナリズム」とした。

本稿では、東南アジアでオリンピックやアジア競技大会より盛りあがる地域のスポーツ大会の成功の原因を明らかにするとともに、日中韓を中心とする東アジアで地域のスポーツ大会が盛りあがり欠け、ついには開催されなくなった原因を考察する。そして、地域にとってのスポーツを考える。

なお、東南アジア競技大会 South East Asian Games のように、地域のスポーツ大会として白熱し身近になっている大会に、南太平洋諸国が参加するパシフィック競技大会 Pacific Games とパシフィック・ミニ競技大会 Pacific Mini Games がある。1963年にサウスパシフィック競技大会としてはじまり、2011年から現名称になったパシフィック競技大会は、はじめは2～3年に1度開催されたが、1971年以降確実に4年に1度開催されるようになった。ソロモン諸島、トンガなどのミニ国家・地域が参加する大会は、81年にサウスパシフィック・ミニ競技大会としてはじまり、2009年から現名称のパシフィック・ミニ競技大会になり、4年に1度開催されるようになった [小林, 2016年, 179–80頁]。

ほかのアジアの地域競技大会は、東南アジア競技大会ほど順調におこなわれていない。南アジア競技大会は、1984年にはじまり85年から95年まで2年おきに開催されたが、以後1999, 2004, 06, 10, 16, 19年と定期的に開催できない状況が続いている。中央アジア競技大会は95年にはじまり97, 99, 2003, 05年に開催、西アジア競技大会は1997年にはじまり2002, 05年に開催したが、その後中断し

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

たままである。

東アジア競技大会は1993年から4年に1度定期的に開催され、2001年から参加国は9ヶ国・地域（中国、グアム、北朝鮮、香港、日本、韓国、マカオ、モンゴル、台湾）に固定したが、それまで北朝鮮が1997年釜山大会に不参加、カザフスタンが同大会のみ参加、グアムが同大会から参加するなど安定しなかった。有力選手が参加しないこともあり、2017年の開催を中止し、19年から14-18歳が対象の東アジアユース大会に衣替える予定であったが、台湾の参加をめぐる紛糾し台中での開催は中止になった。これらの地域競技大会は、定期的に開催できなかつたり、参加メンバーが固定していなかつたりしている。また、圧倒的にメダルを独占する国々にながあって、競技結果に関心がわかない地域がある。

なお、中国をめぐる参加、名称については、複雑な問題がからむため、本稿の議論の対照とせず、以下のような結果のみを概観するにとどめる。1949年に中華人民共和国が成立し、中華民国政府が台湾に逃れた後、中華人民共和国が「ひとつの中国」を主張していることから、中華人民共和国の参加を認めると、「中華民国」や「台湾」の名称の下で参加することはできなくなる。52年のオリンピックで中華人民共和国の参加が認められたが中華民国はこれに抗議して参加を取りやめた。56年には中華人民共和国が直前に参加を取りやめ、58年に国際オリンピック委員会（IOC）などを脱退し、75年まで復帰を申請しなかつた。79年に復帰が認められた後も名称などで紛糾したが、84年に双方の選手団がともに参加することができるようになり、90年のアジア競技大会から台湾は「中華台北チャイニーズタイペイ」の名称で参加している。また、香港やマカオは、中国返還後も「中国香港」「中国澳門」の名称でオリンピックに参加している。

1. オリンピック

1896年にはじまった近代オリンピックにおいて、ヨーロッパ系の欧米豪以外で、最初に開催されたのは1964年の東京であった。その後も夏季オリンピックでは、88年のソウル、2008年の北京、21年に1年延期された東京だけである。冬季では、1972年に札幌、98年に長野、2018年に平昌、22年に北京で開催された。1940年に決定されていた夏季東京、冬季札幌は、日中戦争のため中止になり、代替地での開催も第二次世界大戦の勃発により中止になった。

1950年代以降、オリンピックで東・東南アジア各国・地域が獲得した金メダルの一覧表を見ると、中国国共分断、朝鮮戦争、ベトナム・インドシナ戦争などで不安定な状況が続き、経済的にも大きな発展がなかつたために、日本以外に獲得した国はしばらくなかつた。日本は64年に東京大会を開催したが、その後世界レベルのスポーツは発展せず、90年代にはわずか3個であった。

1970年代に北朝鮮、韓国がそれぞれはじめて金メダルを獲得し、韓国は88年にソウル大会を開催し、その後も10前後を獲得して、世界にその存在を示している。

1984年にはじめて参加した中華人民共和国は、いきなり15個の金メダルを獲得した。80年のモスクワ大会ははじめ、米ソ対立（1991年ソ連崩壊）のあおりなどでボイコットした国々にながあり、国際スポーツ大会の開催が困難な時代がしばらく続いたが、2000年以降、アメリカ合衆国、ロシアとともに世界の三大スポーツ大国になり、メダル獲得数を争った。

2000年になると、タイやインドネシアが金メダルを獲得するようになった。10年代以降、ベトナム

ム、シンガポール、フィリピンもはじめて金メダルを獲得した。

中国が大国であることをスポーツでも示すために国家的に支援し、韓国は北朝鮮との休戦状態が続くなかで、スポーツで世界に存在感を示す必要があった。台湾は2004年以降、毎回金メダルを獲得し、気を吐いている。日本も韓国も開催時に導入された柔道、テコンドーがそれぞれ継続的に競技種目に採用され、金メダル獲得源になっている。2020（2021）東京大会では、柔道の種目数を15に増やし、そのうち9個を獲得したが、新たに導入した男女混合団体戦では銀に終わった。東南アジアでは、もっとも人気のあるサッカーなど団体競技は予選で敗退して出場権を獲得できなかつたり、個人競技は参加標準記録に達した選手がいなかったために派遣できない競技種目が多々あつたりして、全般的に関心は高くない。さらに放映権料が高すぎて、視聴が限られているため、一般に露出度が低い。

2. アジア競技大会

1951年からアジア競技連盟が主催しておこなわれていたアジア競技大会は、86年からアジアオリンピック評議会が主催している。最初の開催が1年ずれ込んだことから第1回と第2回の間が3年間になったが、その後はオリンピックの中間に4年毎におこなわれている。第1回の参加国・地域11、選手489、競技6から2018年の第18回大会ではそれぞれ45,1万1,300,40に膨れあがった。オリンピックと同じ競技が基本だが、1990年からセパタクロー、カバディ、武術太極拳、94年から空手が継続的に正式競技になり、アジア独自の競技もおこなわれている。金メダル獲得数をみると、74年から参加している中華人民共和国が、90年にはじめて開催国になってから圧倒的な強さを示し、2位、3位の韓国と日本をあわせた数より多く獲得するようになった。開催国は、1966, 70, 78, 98年のタイが4度の最多で、ほかの東南アジア各国・地域ではフィリピンが54年の1度、インドネシアが62年から半世紀以上経った2018年に2度目の開催となったが、金メダル獲得数で上位3国の中韓日に遠くおよばない。そのほかの国・地域は一桁止まりで、東南アジア競技大会の次はアジア競技大会の開催だ、という言葉はよく聞かれるが、いまだ実現していない。ベトナムは19年の第18回大会の開催地に決定していたが、14年に辞退した。34年まで開催地が決定しているが、そのなかに東南アジアの国・地域はない。

中韓日の3ヶ国にとって、オリンピックの中間におこなわれる大会は、その2年後のオリンピックを見据えたものになる。そのほかの国・地域は、メダル獲得争いの上位にからむことはなく、特定の得意競技に関心が集まる。継続的におこなわれるようになった競技のほか、ブリッジや囲碁などのボードゲームやソフトテニス、スカッシュなど市民スポーツとして馴染みのあるものが含まれており、オリンピックとはひと味違う愉しみ方をしている。だが、ナショナルリズムに結びつくような盛り上がりには欠ける。

3. 東アジア競技大会

日本オリンピック委員会ホームページでは、「東アジア競技大会の沿革」を、つぎのように説明している [https://www.joc.or.jp/games/east_asia/enkaku.html 2022年7月1日閲覧]。

東アジア競技大会は、東アジア地域の9の国と地域の各国・地域内オリンピック委員会（NOC）

で組織される東アジア競技大会連合（EAGA=East Asian Games Association）が主催する国際総合競技大会です。

アジアでは従来より東南アジア，中部南アジア，西アジアなどでは総合競技大会が開催され，域内交流が図られていましたが，東アジアでは冷戦時代の影響もあって同様の大会が開催されていませんでした。

そこで，東アジア地域のスポーツ交流を盛んにし競技力のレベルアップを図ることを，またこの地域の結束を強めるとともに，オリンピック・ムーブメントの発展に貢献することを目的に，1991年に日本（JOC）が第1回東アジア NOC 会議において大会の開催を提案しました。翌1992年の第3回会議において，1993年第1回大会の中国・上海市での開催が決定されました。当初，2年に1回の開催を目指しましたが，1995年に北朝鮮・平壤市で予定されていた第2回大会は同市の辞退を経て，1997年に韓国・釜山市で開催され，大会も4年に1回となりました。

第2回，第3回大会にはカザフスタン NOC が参加していましたが，OCA 憲章の改定により中央アジアゾーンに区分されました。また，第3回大会にはオーストラリア NOC がオープン参加しています。

日本が提案した1991年の前年90年に北京で開催されたアジア競技大会で，日本は金メダル獲得数38で，開催国の中国の183には遠くおよばず，韓国は54だった。翌92年のオリンピックでは，日本の金メダルは3で，中国の16，韓国の12に比べ，もはやライバルと呼べない存在になっていた。東アジアのスポーツ界をリードする狙いもあったのだろうが，完全に失敗した〔高嶋，2021年，227-52頁〕。参加国は一定せず，競技数24と限られ，夏季オリンピックの前年に4年に1回開催された大会は，オリンピックにあわせて調製しているトップクラスの選手の参加は望めなかった。金メダル獲得数をみると，中国が圧倒的で，日本は韓国を上まわったものの多くを期待できなかった。

2019年から14-18歳を対象とした東アジア・ユース競技大会として再出発する予定だったが，台中での開催を中国が問題視して中止になり，その後の目処は立っていない。

4. 東南アジア競技大会

1959年から，61年の大会が中止になった以外，着実に隔年で開催されている東南アジア競技大会（1959-75年は東南アジア半島競技大会 South East Asian Peninsular Games）は，もっとも成功した地域スポーツ大会といっていだらう（2021年のハノイ大会は新型コロナウイルス感染症により22年に延期）。その原因は，いろいろな点でバランスがとれていることだろう。まず開催国は，タイとマレーシアが各6回，シンガポール，インドネシア，フィリピンが各4回，ミャンマー3回，ベトナム2回，ブルネイ，ラオス各1回で，カンボジア（2023年開催予定）と東ティモールはまだない。第1回から参加のタイ，マレーシア，シンガポール，第9回から参加のインドネシアとフィリピンの5ヶ国が大会を牽引し，1989年から再参加し2003年の大会を開催したベトナムがその後主要5ヶ国の仲間入りしている。当初大会の主要国のひとつであったビルマ／ミャンマーは政情不安のため参加が危ぶまれたときもあったが，アジア競技大会を欠場しても（1982，86年）本大会の参加を取りやめたことは一度もない。ラオスは1989年，カンボジアは95年に再参加，ブルネイは77年，東ティモ

ルは2001年の初参加以来、毎回参加している。

金メダル獲得状況を見ると、開催国が圧倒的に有利な状況がうかがえる。開催前と後の大会の倍あるいはそれ以上獲得している。いわゆる「ご当地競技」があり、種目数を増やして金メダルが獲得しやすいようになっている。これは、1964年のオリンピック東京大会で柔道が採用されたことを踏襲したもので、2020（2021）年の東京大会でも日本は柔道の種目数を増やした。競技種目数は、2020（2021）年オリンピック東京大会の33競技339種目にたいして、2021（2022）年ハノイ大会は40競技523種目（2019年フィリピン大会は56競技530種目）と多く、525個の金メダルを授与している。12日間の日程であるから、開閉会式を除くと205個の金メダルを獲得したベトナムは連日20個ほどの金メダルに沸いたことになる。

金メダル争いをする主要6ヶ国以外の5ヶ国は、大会を愉しんでないかという点、そうでもない。金メダル獲得数が10に満たないミャンマーは銅メダル35、カンボジアは41、ラオスは33を獲得している。「ご当地競技」は参加数が少ないため、開催国はこれらの国々に競技の「手ほどき」をして参加してもらい、その結果銅メダルを獲得して、連日数個のメダル獲得の報道ができるのである。「手ほどき」が、交流のきっかけにもなっている。ブルネイは開催にあまり積極的ではないが、東ティモールにとっては、将来のASEAN加盟を見据えて重要な機会となる。

2年に1度の開催の意義も大きい。主要選手は前年あるいは後年に開催されるオリンピックあるいはアジア競技大会とあわせると、毎年会っていることになり、顔なじみの多い大会なのである。オリンピックやアジア競技大会に出場できなくなっても、東南アジア競技大会に出場する選手生命の長い者もいる。対人関係を重視する海域世界に属する東南アジアの人びとにとって、スポーツ競技を超えた交流の場になっている。

各国のナショナリズムにとっても、東南アジア競技大会は大きな意味があることがわかる。ナショナリズムが昂揚する行事のひとつに祝日がある。節句や宗教行事が祝日になっているが、国民共通の祝日としては独立記念日（建国記念日）や国王の誕生日などがナショナリズムにとって重要になる。ところが、東南アジアの国々にはそれぞれ多様性のなかで国民統合を果たした多民族、多宗教国家であるために、国民全体で祝う日がないかあっても盛りあがらない国がある。マレーシアでは、イスラーム、ヒンドゥ、仏教、キリスト教に関する祝日があるが国民全体が祝うわけではない。国王誕生日もあるが、国王は9州のスルタン（イスラーム王）が5年毎に持ちまわりでなる。独立記念日も、独立戦争を経て勝ちとったわけでもないのに、盛りあがりに欠ける。シンガポールについても同じことがいえる。そのようななかで勢力拮抗のスポーツ大会である東南アジア競技大会は、近隣諸国へのライバル意識で盛りあがる。選手生命が長い者への親しみもあり、引退後、東南アジアのほかの国でコーチになる者もいる。

タイではラーマ9世（1927年12月5日-2016年10月13日）の誕生日にあわせて12月に大会がおこなわれ、2003年のベトナム大会では筋肉トレーニングするホー・チ・ミン（ベトナム民主共和国初代主席、1890-1969）が大々的に登場した。ラーマ9世は自身が1967年にセーリングで優勝し、だれが国王に金メダルを授与するかが話題になった。王より「上」は、王妃しかいなかった。マレーシアは、近年8月31日の独立記念日、9月16日のマレーシアデーに絡むように開催している。

人口2億数千万のインドネシアにたいして、人口数百万のシンガポールがメダル獲得数でも遜色が

表1. 東アジア・東南アジア各国, オリンピック, アジア大会, 東アジア大会, 東南アジア大会金メダル獲得数
1951-2022年
太字は開催国

オリンピック													
開催国 (アジアのみ)	日本	中国	香港	台湾	韓国	北朝鮮	インド ネシア	タイ	ベト ナム	フィリ ピン	シンガ ポール		
1952	1												
1956	4												
1960	4												
1964 日本	16												
1968	11												
1972	13					1							
1976	9				1	1							
1980													
1984	10	15			6								
1988 韓国	5	4			12								
1992	3	16			12								
1996	3	16			7								
2000	5	28			8		1	1					
2004	16	32		2	9		1	3					
2008 中国	13	48		1	9	2	1	2					
2012	7	38		1	13	4							
2016	12	26		1	9	2	1	2	1		1		
2020 日本 (2021)	27	38	1	2	6		1	1		1			

アジア競技大会															
開催国	日本	中国	香港	台湾	韓国	北朝鮮	インド ネシア	タイ	ベト ナム	フィリ ピン	シンガ ポール	ビルマ /ミヤ ンマー	マレー シア	モン ゴル	マカオ
1951 インド	24							1		4	5				
1954 フィリピン	38			2	8					14	1	2			
1958 日本	67			6	8				3	9	1	1			
1962 インドネシア	73				4			2		7	1	2	2		
1966 タイ	77				12		3	12		2		1	7		
1970 タイ	74			1	18		2	9		1		3	5		
1974 イラン	75	33			16	15	3	4			1			2	
1978 タイ	70	51			18	15	8	11		4			2	1	
1982 インド	57	61			28	17	4	1		2	1		1	3	
1986 韓国	58	94	1		93		1	3		4					
1990 中国	38	183			54	12	3	2		1			2	1	
1994 日本 (広島)	64	125		7	63		3	3	1	3	1		4	1	
1998 タイ	52	129	5	19	65	7	6	24	1	1	2	1	5		
2002 韓国 (釜山)	44	150	4	10	96	9	4	14	4	3	5	1	6	1	
2006 カタール	50	165	6	9	58	6	2	13	3	4	8		8	2	
2010 中国 (広州)	48	199	8	13	76	6	4	11	1	3	4	2	9		1
2014 韓国 (仁川)	47	151	6	10	79	11	4	12	1	1	5	2	5	5	
2018 インドネシア	75	132	8	17	56	12	31	11	4	4	4		7	5	1

ないのは、特定の競技に集中しているからだ。人気のサッカーで金メダルをとっても男女1つずつしかない。それにたいして、水泳では英才教育で秀でた選手が出るとひとりで数個の金メダルを獲得することができる。2021 (2022) ハノイ大会でも、シンガポールは水泳40種目中21の金メダルを獲得した(ベトナム11, タイ4, インドネシア2, マレーシア1, フィリピン1)。シンガポールは、16年のオリンピックで同国初の金メダルを水泳で獲得した。シンガポールには、スポーツ博物館、図書館があり、1965年のマレーシア大会で11歳で8個の金メダルを獲得したパトリア・チャン(67年10, 69年10)や77年に13歳で5個の金メダルを獲得したジュニー・スン(79年5, 81年7, 83年10)

表 1. つづき

東アジア競技大会									
開催国	日本	中国	香港	台湾	韓国	北朝鮮	カザフスタン	モンゴル	マカオ
1993 中国（上海）	25	105	1	6	23	10			
1997 韓国（釜山）	47	62	1	8	45		24	3	
2001 日本（大阪）	61	85	3	6	34		13	1	1
2005 マカオ	46	127	2	12	32	6		1	11
2009 中国香港	62	113	26	8	39	6			8
2013 中国（天津）	47	134	10	17	36	8			3

東南アジア競技大会											
開催国	タイ	ビルマ／ミャンマー	マレーシア	シンガポール	ベトナム	ラオス	カンボジア	インドネシア	フィリピン	ブルネイ	東ティモール
1959 タイ	35	11	8	8	5						
1961 ビルマ	21	35	16	4	9		1				
1965 マレーシア	38	18	33	26	5		15				
1967 タイ	77	11	23	28	6						
1969 ビルマ	32	57	16	31	9						
1971 マレーシア	44	20	41	32	3		17				
1973 シンガポール	47	28	30	45	2		9				
1975 タイ	80	28	27	38							
1977 マレーシア	37	25	21	14				62	31		
1979 インドネシア	50	26	19	16				92	24		
1981 フィリピン	62	15	16	12				85	55		
1983 シンガポール	49	18	16	38				64	49		
1985 タイ	92	13	26	16				62	43		
1987 インドネシア	63	13	35	19				183	59	1	
1989 マレーシア	62	10	67	32	3			102	26	1	
1991 フィリピン	72	12	36	18	7			92	91		
1993 シンガポール	63	8	43	50	9			88	57	1	
1995 タイ	157	4	31	26	10			77	33		
1997 インドネシア	83	8	55	30	35			194	43		
1999 ブルネイ	65	3	57	23	17	1		44	19	4	
2001 マレーシア	103	19	111	22	33	1	1	72	30		
2003 ベトナム	90	16	44	30	158	1	1	55	48	1	
2005 フィリピン	87	17	61	42	71	3		50	112	1	
2007 タイ	183	14	68	43	64	5	2	56	41	1	
2009 ラオス	86	12	40	33	83	33	3	43	38	1	
2011 インドネシア	109	16	58	42	96	9	4	182	37		1
2013 ミャンマー	108	84	43	35	74	13	8	64	29	1	2
2015 シンガポール	95	12	62	84	73		1	47	29		
2017 マレーシア	72	7	145	57	58	2	3	38	24		
2019 フィリピン	92	4	55	53	98	1	4	72	149	2	
2021 (2022) ベトナム	92	9	39	47	205	2	9	69	52	1	

など、つぎつぎと現れるヒロインの活躍が展示されている。

〈おわりに〉

東アジアのスポーツ史は、高嶋航著『スポーツからみる東アジア史』（岩波新書、2021年）によって、その概略がわかる。副題に「分断と連帯の二〇世紀」とあるように、中国と朝鮮のそれぞれ分断のなかで連帯が模索された歴史であった。だが、この本を読むと、政治的駆け引きばかりで、うんざりする記述がつづく。それにたいして、『東南アジアのスポーツ・ナショナリズム—SEAP GAMES/

SEA GAMES 1959-2019年』(めこん, 2020年)では、人びとが愉しんでいることがよくわかる。表紙に各大会のマスコットをあしらったが、それは各大会を開催国も参加者も愉しんでいることをあらわしたかったからである。競技レベルはオリンピックどころかアジア競技大会にもおよばない競技がほとんどで、大会運営にいたってはお粗末としかいいようがないのだが、大会終了後には、いつも開催国も参加国も大成功だったと自画自賛し、選手・役員は2年後の再会を約して別れる。大会中にあった数々のトラブル、選手自身がいつどこで競技がおこなわれるかわからず延々と迎えの車を待ったり、審判があからさまに最悪しているとボイコットしたりしても、気持ちよく帰国する。

流動性の激しい海域世界に属する東南アジアでは、完璧に準備して運営するより、そこそこに準備して、問題が起これば臨機応変に対応するようにしている。問題が十分に解決されないことは織り込み済みで、いつときは問題になっても対人関係を重視し、後腐れがないように努める。それが理解しあえる東南アジア諸国だけの大会であるから、愉しむことに集中できる。自国だけでなく、相手国も応援するので、どちらがホームの選手かわからないこともある。新型コロナウイルス感染症でも、徹底的に抑える政策とほどほどにする政策がある。ほどほどにするのは、流動性の激しい海域東南アジアの特性でもある。それは、今日のグローバル社会に通じるものでもある。

2015年に東南アジア共同体が成立し、日本、中国、アメリカなどの大国が、影響力を強めようとしているなかで、08年のタイとカンボジアの国境の寺院をめぐるユネスコ世界遺産登録をきっかけに起こったプレア・ビヘア事件(12年両軍撤退)以来、アセアン加盟国間の軍事的衝突は起こっていない。各種世論調査でも、アセアンの重要性が高まっている。たとえば、日本の外務省による「海外に於ける対日世論調査」で「最も信頼できるのはどの国・機関ですか」という問いにたいして、各国それぞれ違いはあるが、全体ではASEANが20%で、中国19%、日本16%、アメリカ14%を上まわった[<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100348514.pdf> 2022年7月6日閲覧]。東南アジア競技大会が、連帯の一要因となったことは間違いないだろう。そして、アセアンはその輪を北へ拡げていき、東アジア共同体へと構想している。その手はじめとして、20年に署名され22年に発効した「地域包括的経済連携 RCEP」があり、日本・中国・韓国・ASEAN10ヶ国に、オーストラリアとニュージーランドを加えた15ヶ国が参加している。東南アジア競技大会はナショナリズムだけでなく、地域統合にも貢献している。

では、日中韓を中心とする東アジアでは、スポーツは政治的駆け引きの材料になっても「連帯」の役には立たないのであろうか。東南アジア競技大会から学べることは、成功の原因のひとつである「ご当地競技」を活用することだろう。似たような競技があるため参加しやすいだろう。セパタクローのように、ルールを統一してアジア競技大会の正式種目になることもあるかもしれない。「ご当地競技」を他国に「手ほどき」して交流のきっかけにもなるだろう。また、高齢者や小中高校生を含む生涯スポーツを導入して、世代を超えて愉しめる競技で競うのもいいだろう。いっぽうで、競技化や制度化で廃れた儀礼的要素や社会的機能に目を向け、それぞれの地域社会を理解する術にするのもいいだろう。オリンピックを頂点とする下部組織としての競技大会ではなく、地域の特性をいかしたただれでもが愉しめるものにするすることで、地域共通の社会問題でもある少子高齢化社会のなかでのスポーツを考える場になる。

その意味で、地域競技大会ではないが、2022年7月28日～8月8日にバーミンガムで開催された

第22回コモンウェルス競技大会は注目に値する。イギリス連邦に属する72の国と地域が参加する競技大会は、旧イギリス帝国の遺産との陰口も聞かれるが、開催地や競技種目、そして関連イベントで、イギリスのスポーツ文化が垣間見える。政治的駆け引きとしてのスポーツではなく、文化としてのスポーツを愉しむことを教えてくれる。

参考文献

小林勉『スポーツで挑む社会貢献』創文企画，2016年。

高嶋航『スポーツからみる東アジア史—分断と連帯の二〇世紀』岩波新書，2021年。

早瀬晋三『東南アジアのスポーツ・ナショナリズム—SEAP GAMES/SEA GAMES 1959–2019年』めこん，2020年。